
Wall Kill All

倫敦蹴球愛好会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W a 1 1 K i 1 1 A 1 1

【NZコード】

N 1 8 3 4 F

【作者名】

倫敦蹴球愛好会

【あらすじ】

ちっこくて可愛らしいけど、最凶な先輩。美人で聰明だけど、非道な楠さん。そして、ただただ振り回される俺。とんでも無い状況から、いきなり物語は始まる。

第1話 ウォール キル オール（前書き）

基本的にコメディ路線ですが、若干残酷な描写があります。

第1話 ウォール キル オール

「「めん。 本当「」めん。

決つしてね悪気があつた訳じゃないんだよ。 本当だよ、信じて。 神様に誓つてもいいよ。

あ、でも私つて神様信じて無いんだつた。

そうだ、なんだったら隣の家の猫のミィヤちゃんに誓つてもいいよ。 それが駄目なら、私が大好きな、めんたいこチップスに誓つてもいいよ。

とにかく私が悪いんじゃないんだよ。

これはね、あれよあれ。 あれなのよ、あれ！ えーと、事故だよ！ 事故なんだよ！

偶発的に突発的に起こつてしまつた事故だよ！

運命的に輪廻的に不運的に起こつてしまつた事故なんだつてば！」 長い髪を振り乱し、小さな体全体を使って、彼女は愛くるしく必死にあやまつていた。

確か彼女は俺より1つ年上のはずだが、そのしげさや言動は見ているとまるで小動物を思わせるような可愛いらしさだ。

こんな状況でなかつたら、俺は口口りと彼女に一目惚れしたかもしない。

「それで？」

それに対しても楠さんは、びっくりするくらい冷淡な声だった。

楠さんの赤いフレームの眼鏡のレンズが、ギラリと鈍く光る。

短くバツサリと切つた前髪を髪留めで止めておでこを出している顔は、利発そうでいて意思の強そうな顔立ちだ。

いまはその顔が能面のよつた無表情で、えも言われぬ迫力を醸し出している。

俺はと言えば

今この状況が理解できずに、ただただ立ちつくしている。

この状況で、これだけ冷淡でいられる楠さんは、それはそれで凄い事の気がする。

楠さんは無表情なまま、口だけを動かしてもう一度聞いた。

「それで？」

そんな楠さんを彼女は上目づかいで覗き込むようにして、『機嫌を伺うように聞きかえした。

「『それで？』って？」

「それで、どうやつたら、こんな結果になるんですか？」

楠さんの声はあくまでも冷淡だ。

「えーと……くーちゃん。ひょっとして…怒ってる？」

「怒つてないですよ、別に。」

「怒つてるでしょ？ 本当は私に怒つてるんでしょ？」

「怒つてないですよ。怒つてないですから先輩、何故こんな結果になつたのか教えてくださいよ。」

「ほら、怒つてるじやん。だつて声が怒つてるもん。」

「怒つてないですから、とりあえず教えてください。」

「もう、そんな怒らないでよ。怒つてないとか言いながら声が怒つてるじやん！ まるで私が悪いみたいじやん！ つづきから私は悪く無いって言つてるでしょ！」

楠さんはハアアアアアアと一つ深いため息をついて脱力してしまった。

すぐ隣にいた俺には、楠さんが小さくつぶやく声が聞こえていた。

『マツタク イツモイツモイツモイツモ』

それから楠さんは改めて気を取り直したようだ。

につつこと、少し引きつった笑いを浮かべながら再び先輩に問い合わせた。

「ねえ先輩」

楠さんの笑顔につられたのか、何も考へてないのか、先輩もつっこり笑つて答える。

「なに？ くーちゃん？」

「先輩の足元に転がってる『物』は何ですか？」

先輩は自分の足元を見る。

足元に転がっているいくつかの『物』の中で一番近くにある『物』をローファーの先でつんつんと突つぐ。

それが何なのか改めて確認しているようだ。

それから先輩は天真爛漫、顔いっぱいに笑みを浮かべながら元気に答えた。

「えーと、右手！」

その答えを聞いた楠さんは、また怖い程の無表情に逆戻りする。楠さんの体から、冷たい冷氣のような物が漂っている感じさえする。しかし先輩は、そんな楠さんの変化にまったく気づいていないらしい。

足元に転がっている『物』をまたつんつんとローファーの先で突きながら言った。

「あ、ごめん間違えた！これって左手だつた！」

楠さんは、隣にいる俺だけが解かるくらいうに小さくだけど、ワナワナと全身が小刻みに震えていた。

「いや、そーゆー具体的な部位の話で、無くてですね。」

「ん？この手の事じゃなくて、こっちの…」

先輩はまた別の『物』をローファーの先で突つぐ。

今度は突つぐだけではなくて、『ゴン』と蹴つて、『ゴロ』と転がして見る。

それからまた天真爛漫、顔いっぱいに子供の様な笑顔を浮かべてこう言った。

「こっちの、頭の事？」

「そうじゃなくって……なんで、なんで、交渉に当たつたはずの相手が死体になつてるんですか？」

楠さんは先輩の足元を指差しながら聞いた。

ワナワナと震える楠さんの全身の震えは、一言一言話すことによ少しづつ大きくなっている。

「しかも8体も死体があるって、どういう事なんですか？私にも解かるように1からちゃんと説明してくださいよ。」

「私は悪くないよ。本当だよ。だって、こいつ等が、『ごねるんだもん！あんな良い条件で交渉してるのに』『ねるんだもん！だからだから…』

「だから？」

「だから、めんどくせくなつて、…」

先輩はピラコラと舌を出して、ポコンと自分の頭を叩いて、かわいらしく言った。

「殺しちやつた エヘ」

血の海の真ん中で。バラバラに刻まれ累々とつまれる死体の山の真ん中で。

まだ生暖かい血が滴るナイフを片手に

返り血でぐずぐずに濡れた高校の制服のまま
先輩は天使の様に微笑んでいた。

「『殺しちやつた エヘ』ってかわらしく誤魔化そうとしても駄目ですよ…なにやつてるんですかーーー！」

楠さんはブチ切れた。

クラス1いや学年1成績優秀。学校創立以来の才女。そう呼ばれていて、いつも冷静沈着で物静かな楠さん。

「めめめめんどくさくなつた…って、そんな理由で殺してしまつて、どうするんですかーー！」

教室の後ろで難しそうな分厚いハードブックを読んでいる普段の楠さんからは、まったく想像できない光景だった。

「いつもいつもいつもいつもいつも殺しちやつて、それで済むとおもつて…だから先輩は、奴らから『皆殺しのリリイ』って呼ばれるんですよ！」

「なー言つたわねー言つちやつてくれたわね、くーちゃんー私がそ

の呼ばれ方で呼ばれるの大嫌いなの知つてて、言つちやつてくれたわね！」

「後先考えずに殺しちゃつ先輩が悪いんでしょうが…これで何度もですか！この前の時だつて10人も殺害してるんですよ。」

「10人じゃないもん。12人だもん。」

なぜか先輩は、腰に手を当ててエツヘンと自慢げだった。

「自慢してどうするんですか！そんなんだから『皆殺しのリリイ』つて呼ばれ続けるんですよ！」

「あー！くーちゃんまた言つた。一回も言つた！酷い酷い！」

「ええ 言いましたよ。言いましたとも。お望みとあらば何度でも言つあげますよ、『皆殺しのリリイ』つてね！」

「あー もう！また言つてくーちゃんのいじめつじー鬼！魔魔！冷血漢！」

「ふふん、好きにほざけばいいですよ。『皆殺しのリリイ』さん。『いじめつじージャニアーズム！サディスト！貧乳！加虐性欲者！嗜虐的関与者！』

楠さんの眼鏡のレンズが、ギラリと鈍く光る。

「ちょっと先輩」

楠さんが、また無表情に戻つていた。

無表情なのだが、さつきまでとは、また雰囲気がちがう。明らかに、もう一レベルやばい段階に踏み込んでいる。

「今、先輩、さり気なーく『貧乳』つて言いませんでした？」

この楠さんのやばい変化には、さすがの先輩も気づいた様だ。

「言つてない、言つてないよ。そんな事これっぽつちも言つてないよ。」

先輩は首をフルフルと左右に振つて否定する。

「今、言つたでしょ？『貧乳』つて言つたでしょ？」

「言つてないよーくーちゃんの事をド貧乳とか、まな板とか、胸だけ少年ナイフとか、そんな事ちつとも言つてないよ。」

先輩は、必死になつて首を左右にぶんぶんと振つて否定する。

首を思いつゝきり振り回したせいで、血で塗れた長い髪が自分自身に絡みついてしまった。

先輩は髪を振りほどけつゝと、一人でジタバタとその場で暴れ出す。

楠さんは、

「ちょっとばかし…、」

楠さんが、誰の目から見てもわかる程、全身をワナワナと震わしている。

「ちょっとばかし自分が胸が膨らんでるからって偉そうにしてんじゃないわよ…！」

「もーかんべんならんわ！この『ノータリンリリイ』が…！」

「あー それだけは言わないつて約束だつたのに…言つた…言つちやつた！信じられない！くーちゃん信じらんない…！」

「えーい、うるさいわ…！」の『ロリーータ体型チチデカノータリンリリイ』が…」

「ひどーいーくーちゃんひどいーー壁みたいな胸してるくせに、くーちゃんひどーい！」

今度は先輩が、ブチキレル番だつた。

なんと、先輩は足元にある右手いや左手を拾いあげて思いつきり振りかぶつた。

「くーちゃんの、馬鹿ー…！」

誰の物とも解らない左手を、楠さんにめがけて投げつける。

「ええい！馬鹿なのは先輩でしようが…」

飛んできた左手をさらりと交わす。

そして、なんと楠さんも自分の足元に転がっていた誰の物とも解からぬ左足を拾い上げ、力強く振りかぶつたのだった。

「くーえーこの『デカチチヨーブントラレマクリノータリンリイ』…！」

思いつきり先輩に向けて投げつけた。

キヤー キヤーと叫びながら死体を投げ合つ美少女二人。

あまりにもシユールな光景だった。

俺はその光景を、ただただ呆然と眺めていた。

「あ！」

先輩のあげた声で、俺はハツと気づいた。

な、

生首が飛んでくる。

俺目がけて、ものすごいスピードで生首が飛んでくる。

先輩が楠さんめがけて投げつけようとした生首が、血で手が滑つてしまい、俺に目がけてなげてしまったのだ。

常人ではよけられない様な猛スピードで生首は飛んできた。

ガ！

人の頭つて堅いんだよね…

そんな事を頭の片隅に思いながら、

生首に直撃された俺は、意識の闇へと落ちていった。

第2話 ムーン イズ ハッシュ ミストレス（前書き）

基本コメディですがたまに、残酷な表現があります。

第2話 ムーン イズ ハッシュ キストレス

俺は、気がつくと

帰宅するために、家に向かつて歩いている途中だった。

な、なんだ？

おかしいぞ。おかしいだろ？

気がつくと、『家に向かつて歩いている途中』っておかしいだろう。

でも、自分の事なのでまちがいようが無い。気がついたら、確かに俺は、歩いている途中だったのだ。

それにもだな。

あんな気の失い方して、目が覚めたら歩いている途中っておかしすぎるだろう。

あんな気の失い方して……あれ？ 变だ？ どんな、気の失い方をしたんだ？

なんで、俺は気を失ったんだ？

頭に霧が被つたようにうまく思い出す事ができない。

道ばたで頭を抱えて、ついさっきの出来事を思い出そうとする。少しだけ、少しだけ、思い出したぞ・・

いくつかのキーワードが頭に思い浮かぶ。

・デカチチ・ノータリン・貧乳・

うーむ、なんだか単に俺は欲求不満の変な奴みたいなキーワードだな。

なんだか思い出すのが嫌な気分になってきた。

そんな事を思っていたら、不意に思い出した。

あの光景を…

血の海の真ん中で。

バラバラに刻まれ累々とつまれる死体の山の真ん中で。

天使の様に微笑む先輩を

『貧乳』と呼ばれて逆上する楠さんを

そして死体を投げ合つ一人のシユールな光景を

「楠さん」

俺が声をかけると彼女は本から顔を上げた。

「はい？」

まるで何事も無かつたかのような平穏そのものな表情だ。

次の日の朝

俺は登校するとすぐさま、クラスの一一番後ろの席にいる楠さんに声をかけた。

楠さんはいつもどうりに誰よりも早く登校してきていた。朝の光が差し込む明るい教室で、いつもどうりに静かに分厚いハードブックの小説を読んでいる。

こいつそりと本の題名を盗み見ると『月は無慈悲な夜の女王』と言つ題名だ。

どんな内容の話なのか想像もつかない。

とにかく難しそうな本ではあるが、とりあえず今は、本の内容は関係無い。

「昨日の事なんだけども

「昨日のことって？」

そう言つて楠さんは少しだけ首を傾げて、眼鏡の奥から俺をのぞき込む。

楠さんの口元にはやさしい微笑が、自然に浮かんでいる。

楠さんはまったく動じた様子はない。普通に世間話をしている感じだ。

昨日の出来事は、俺の夢か、はたまた妄想だつたのだろうか？
普通に考えれば、あんな事が起こるはずが無い。
なんだか不安になつてくる。

でも、

確かに、あの光景だけは俺の脳裏に焼き付いているのだ。
俺は気をとりなして聞いてみる。

「昨日のあの死体の事なんだけど……」

気のせいかも知れないが

楠さんの眼鏡が、ギラリと鈍く光つた気がする。
「死体？」

「昨日、先輩が殺したグゲツキイ！…」

俺は思わず奇声をあげていた。

楠さんの肘打ちが、みぞおちにクリティカルヒットしたのだ。
周りからは、俺の体が影になつて見えない絶妙な角度だった。
俺が急に奇声をあげたようにしか、周りの人間には見えなかつた
だろう。

「どうしたの？急に発情期のオオアリクイみたいな奇声をあげて？」
しれつと、楠さんが聞いてきた。

俺は反論しようとしたけど、ゼハゼハと変な呼吸を繰り返すだけだ。

あまりにも見事な肘打ちをみぞおちに喰らつたせいで、まともに
呼吸もできない。

「大丈夫？え？お腹が痛いの？それは大変！すぐに保健室に行かな
いといけないわね。ちょうどいいわ、私保険委員なのよ。連れて行
つてあげるわね。」

ものすごく説明的なセリフを、誰に言つとも無く言つてから立ち
上がる。

そして楠さんは俺の手をつかんで無理矢理に廊下にひっぱり出し

そうとする。

俺は訳が解からず、思わず足を踏ん張つて抵抗してしまった。

その瞬間

楠さんはさり気無く、俺の手首を捻り上げる。

！！！

激痛が手首から頭のテッペンまで駆け抜ける。

楠さんは、手首の関節を極めたまま無理矢理にグイグイと俺を引つぱつていく。

アダダダダダダダダ

俺は

声にならない悲鳴をあげながら楠さんに必死についていくのがやつとだった。

第3話 アークサム メン

楠さんはサツサツと廊下を歩いていき、階段を下り保健室に向かう。

俺は手首の痛みに耐えながら、連行される犯罪者の様な気分でついて行く。

ちょうど生徒が登校していく時間帯で、多くの知り合いともすれ違つた。

楠さんは知り合いやクラスメイトにこっやかに挨拶を交わしていき、俺は脂汗をたらしながらゼハゼハと荒い息をして、皆からは色んな意味で心配そうな視線を送られた。

保健室に入ると、楠さんはぐるりと振るかえる。

「昨日の事、憶えてるの？」

赤いフレームの眼鏡の奥から、俺に問い合わせてきた。

俺はやっと解放された手首をさすりながら、楠さんの質問に答えようとする。

けど、やっぱりゼハゼハと息をするのがやつとだった。

そんな俺の様子をみると目の前にいた楠さんは、こいつと笑つて、一步前進して俺に近づいてきた。

俺のすぐ目の前、鼻の頭が楠さんのおでこにふれそうな距離に近づいてくる。

「な、なんだ？」

あまりに距離が近すぎて、俺は動搖してしまつ。

その瞬間

「ふっ！」

楠さんが氣合い一閃

俺に腹に、今度は楠さんの拳がのめり込む。

一瞬息が止まる。

その後、痛みと共に今まで肺にたまっていた空気が一気に外に流れだしていった。

「いだだだだ。さつきから何するんだよー。」

俺が抗議の悲鳴をあげると、楠さんは眼鏡の奥で柔らかく微笑した。

「これで、話せるようになつたでしょ？」

楠さんの微笑があまりに素敵だったのと、そしてその微笑があまりにもすぐ目の前にありすぎたせいで、俺は次の言葉が出てこなかつた。俺の抗議は、そこで尻すぼみで終わってしまった。

「さてと」

楠さんは一歩下がつて、普通の距離で俺に向き直り改めて質問をしてきた。

「昨日の事、覚えてるの？」

「あんな事が会つて、忘れる訳無いだろ？」

「どうやつ、本当に憶えてるみたいね」

「だから、忘れるほうが変だつて」

俺の返答に聞いて、楠さんは腕を組み、うへへむと悩みだす。そして、そのまま少しの間、悩み続けてしまつた。

俺は聞きたい事が山の様にあつた。

けど、悩んでる所を邪魔するのは悪い気がして、楠さんが悩み終わるのをとりあえず待つ事にした。

不意に楠さんがつぶやいた。

「どうあえず、もう一回やつてみよつかしら」

「もう1回？ 何を？」

俺の問いかけには耳も貸さず、楠さんはいきなり保健室のカーテンを締め出した。

朝の光は遮れ、室内が鬱うつと暗くなる。

「ちよつとこつちきて」

楠さんがベッドの横で手招きする。

俺は事態が解らず突つ立つたつていると、彼女は俺の手をひっぱ

リベッドの所へ連れて行く。

ボン、と俺を突き飛ばし無理矢理ベッドに放り込む。
そして保健室のドアの所までトコトコと歩いて行って

力チャヤリ

と鍵をしめた。

なんだ? なんなんだ?

楠さんが、柔らかく笑う。

ゆつくりと、ベッドにいる俺に近づいてくる。

そして、

楠さんは、自分のセーラー服の胸元に手を入れながらわざやく様に言った。

「見て…」

「え? そ それは?」

俺にはまつたく事態が飲み込めない。

「いいから…見てほしいの…」

楠さんは、もつすでに俺のすぐ近くまで寄ってきていた。

俺の目の前には、

「何も言わずに……ただ見つめて…」

俺の目の前には、深紅のペンダントがコラコラと揺れている。

楠さんの胸元から取り出した、深紅のペンダントがコラコラと揺れている。

いつの間にかペンダントの揺れにあわせて俺の体も揺れていた。

少しづつ少しづつ意識が遠のいていく。

楠さんがブツブツと何かを囁いているのが聞こえるが、内容が聞き取れない。

俺の世界には、ただ深紅のペンダントがコラコラと揺れているだけだった。

パン！

目の前で楠さんが手を叩く。

俺はびっくりして飛び起きた。

あれ？

いつの間にか、少し眠ってしまったようだ。

俺のすぐ横で楠さんが優しく優しく微笑んでいた。

「もう、びっくりしたわよ。貴方つたら教室でお腹を押されて急に倒れてしまふんですもの。とっても苦しかったから、とても心配だったのよ。でも、もう大丈夫よね？さつき薬も飲んだし、少し休んだものね。もう大丈夫でしょ？」

俺は寝起きの頭で少しボーとしながら答える。

「そうか、俺は教室でお腹がいたくなつて倒れちゃったのか。」

「うんうん、そうよ。それで私が保健室まで連れてきてあげたのよ。」

「

楠さんは、飛び切りの微笑みを浮かべている。

とてもうれしそうだ。色んな意味で。

「そうかー 倒れた俺を保健室まで つて言つたか！…さつきのペンドントは何なんだよ！？ついでに聞くけど昨日の死体も何なんだよ！」

「

俺の質問に、さつきまで一〇一一〇笑っていた楠さんが急に無表情になる。

能面のよがよが、怖いくらいの無表情だ。

小さく小さくボソッと

『チツ メンドクサイヤローダナ』

と、呟いたのが聞こえた気がするが、気のせいだと信じたい。

第4話 ラン メロス

「どうやら、貴方は効果が出にくい体质みたいね」

楠さんは軽くため息をついてから、俺に向き直る。

「まあ、仕方無いわ。それで?どのくらい昨日の事は覚えてるの?..」

楠さんの眼鏡のレンズがギラリと光る。

綺麗な顔には、もうまったく笑みは浮かんでいない。

かなり無表情に近い状態になってしまっている。

俺はそんな楠さんの雰囲気に気後れしながらも、自分が覚えていた事を説明した。

死体の山、その中心で微笑む先輩、死体を投げ合つ二人。

「一つほど気になる事があるんだけど、質問していいかしら?」

俺が話し終わると、楠さんが無表情に質問してきた。

もちろん俺に断れるハズもない。

「どんどん聞いてくれ」

「では、まず一つ目ね」

楠さんは、俺の目の前に人差し指を一本を突きつけてから話しだす。

「貴方の話を聞いていると、なぜか『あの事』が話に出でこないのよね。昨日のトラブルに巻き込まれるきっかけになつた『あの事』は覚えていないの?」

なぬ?

楠さんの話を聞いて、俺の頭の中にはでっかいクエスチョンマークが浮かんできた。

そうだ、なぜ俺があんな状況の中にいたんだ?

何かしら、巻き込まれるきっかけがあつたはずだ。

改めて思い出せうとしてみても、その部分が全く思い出せない。

「その表情から察すると、貴方はどうやら『あの事』は綺麗スッカリ、スッカラカンに忘れてるみたいね」

「うむ。確かになぜ巻き込まれたのか、その部分が完全に記憶から抜け落ちてるな」

俺の返答を聞くと、ほんのわずかだが楠さんの口元がニヤリと笑つた。

ちょっと氣になつてきた。

いつたい何があつたんだ？

「俺が巻き込まれるきっかけになつた『あの事』って何なんだ？」

「では、一いつ田の質問ね」

俺の質問をあからさまに無視して、楠さんはピースの様に一本指を立て、顔の前に突きつけてきた。

「一いつ田の質問は、それほどたいした意味は無いのよ。だから氣にしている訳じやないの。ほんのちょっとだけ気にしてるだけなのよ。けつして深い意味は無いの。だからね、忘れてるなら忘れたままでもいいのよ。あくまでも確認のために聞くだけだから。けつして気にしてる訳じやないのよ。その所は勘違いしないでね。」

妙に長い前置きをおいてから、赤いフレームの眼鏡をギラリと光らせて、

楠さんは本題にはいつた。

「先輩が私に対して言つた、罵倒の言葉は覚えてるの？」

『貧乳』

と、言つた言葉がすぐさま頭に浮かんだ。

しかし、俺は喉まで出かかったその言葉をあわてて飲み込んだ。

その言葉をそのまま言つてしまつて、これ以上、自分の身を危険に晒すほど俺は愚か者でも無い。

「いや、なんだつたかな？キヤーキヤー騒いで死体を投げ合つていたのは覚えてるけど、何を叫んでいたのかまでは、よく覚えてないな

「それなら、それで問題ないわ」

俺の答えに、楠さんは満足そうに微笑んだ。

今度の微笑みは心からうれしそうな本物の微笑みに見えたのは、俺の気のせいでは無いだろう。

そして、今さら気づいたのだが…

楠さんは微笑むとむちやくちゃに美人だな。

眼鏡の奥の少しきつめの瞳は知性的な光りを帯びている。ほつそりとした顎のラインなんかは有名な画家が描いた美人画のようだ。スタイルだつて、ほつそりと瘦せて手足がスラツと長くヨーロッパの雑誌のモデルのようだ。雪の様に白い肌がその細さをさらに強調している。静かに本を読んでいる姿などはまさに『アジアンビューティー』と言つ見出しど共に雑誌に載つても不思議じやないくらいだ。

まあ、性格の方には、かなり問題がありそつだが。

そこで始業を知らせるベルが鳴り響いた。

「あら、どうやらタイムオーバーね」

楠さんは、すっかりいつも優等生な楠さんの表情になつっていた。うつすらと優しそうな微笑を浮かべて、とても人当たりの良い話し方にもどつていた。

「まだ、ちょっと話したい事があるから続きを昼休みにしたいけど。いいかしら?」

俺もけつときよく聞きたい事は、殆ど聞けずじまいだ。もちろん異論は無い。

俺は肯定の意味でうなずいた。

「あ、まつて。やっぱり続きを放課後でいいかしら?」

「俺は構わないけど、なんで放課後なんだ?」

「一応なんだけど、先輩にも相談しておかないと。相談してもだいたい口クでも無い事を言い出すだけで余計にめんどくさい事になる

だけ、なんだけどね。でもあの先輩、教えておかないとスネひやうのよ。一度昼休みにでも話してくるわ」

楠さんは、肩をすくめて見せた。

「それじゃ、また放課後よろしくね。……えーと……」

そこで楠さんは、言い淀む。

すじく苦惱した表情が楠さんの顔に浮かんできた。何を悩んでいるんだ？

「う、ごめんなさい。聞いてもいいかしら？」

楠さんは、ものすごく申し訳なさそうな表情をしてくる。

「何を？」

俺が聞き返すと、楠さんはおずおずと聞いてきた。「貴方の名前なんだつけ？」

『ガーン……』

頭の中で、昔の漫畫風な擬音が鳴り響く。

そりやーね！俺はクラスでも目立たない男ですよー。

今日まで一度もまともに、楠さんと話もしたこともないですよー。

楠さんみたいに有能じゃないですよー。

俺だつてクラスメイトの名前を全部覚えてる訳じゃないですよー。

それでも それでも！

やつぱつちよつとショックだ！

そんな心の叫びをかみ殺して、俺はなるべく平静を装つて答えた。

「俺は津島、津島修治だよ。覚えていてくれよ」

「え？ 津島修治？ 本名なの？」

俺の名前になぜか楠さんは目を丸くして驚いている。

「もちろん本名だよ。嘘なんか言つてどうするんだよ」

「津島修治つて…そんな名前の人人がクラスにいるとは知らなかつたわ。だつて津島君つて全然クラスで目立たないんですけどの」

さりげなく心をえぐる事を言われて、かなり傷ついた。

しかし、それよりも気になつたことがあつた。

「楠さん。俺の名前を聞いて驚いてたみたいだけど、なんだだ？」

俺の質問に楠さんは、急に笑い出した。

何か笑いのツボにはいつたらしくてお腹を抱えて大笑いしている。

「何、笑ってるんだよ？」

「笑つたりして、ごめんなさい。でも、ひょっとして貴方、自分で
は気づいてないの？」

「何が？」

楠さんは、コホンとひとつ咳払いしてから、歌うように言った。
「真実とは決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしも仲間に
入れてくれまいか。どうかわしの願いを聞き入れて、おまえらの仲
間の一人にしてほしい」

??

「意味がわからん。」

楠さんは楽しそうにクスクスクと笑う。

「話の続きを放課後ね。早く教室に行かないと、もう授業が始まる
わよ、津島君」

そう言って、楠さんは軽やかな足取りで保健室から出て行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1834f/>

Wall Kill All

2010年10月10日15時36分発行